～地域おこし協力隊座談会～

愛媛県内の地域おこし協力隊の活動内容と展望について

平成24年2月17日（金）、㈶えひめ地域政策研究センターにおいて、当センター主催による「地域おこし協力隊座談会」を開催しました。当日は地域おこし協力隊の活動や問題点、課題など活発な意見交換が行われました。その模様をお届けします。

参加者

小笠原　幸男
（伊予市まちづくり創造課 主査）
冨田　敏
（伊予市地域おこし協力隊）
三好　進祐
（西予市企画調整課 主査）
檜垣　忠雄
（せいよ集落応援隊）
山尾　宥翔
（上島町企画政策課 主事補）
大井　十和子
（上島町島おこし協力隊）
小倉　浩
（愛媛県地域政策課 主任）
森　敏明
（えひめ地域政策研究センター 所長）
須山　広周《コーディネーター》
（えひめ地域政策研究センター 主任研究員）
川渕　博之
（えひめ地域政策研究センター 研究員）

【活動の概要】

須山「みなさん、こんにちは。今日は、地域おこし協力隊の座談会にご参加いただき、ありがとうございます。最近、各種メディアで地域おこし協力隊の活動が全国的に取り上げられてきていますが、『舞たうん』でも地域おこし協力隊の特集を組むことになりました。

今日は、地域おこし協力隊の方々を中心に、現状や課題などを語り合っていただきますが、これから導入しようとする地域への参考にしてほしいと思っています。まずは、それぞれの地域おこし協力隊の活動とその市町の取組みについてお話をお願いします。」

冨田「伊予市の冨田です。去年の7月1日から伊予市双海町下灘に住んでいます。東京での広告の仕事を金融危機の影響で辞めていましたが、その後震災が発生し、果たしてここで子供を育てていいのかという思いがありました。以前から将来はどこかの地域でのんびり暮らしたいなという希望もあり、この機会にこちらにやってきました。

冨田　敏氏

今年度はJR下灘駅を拠点に演劇や写真コンテストなどに取組み、JTBさんの交流文化賞に応募して優秀賞をいただきました。また、来年度は、双海町の魅力をもっと知ってもらうため、『観光』というキーワードで、モニターツアーを定期的にやっていきたいと思っています。」

小笠原「伊予市役所の小笠原です。住民自治を推進する中で持続可能なまちづくりの仕組みをなんとか作っていただくため、地域おこし協力隊を導入することになりました。現在、お2人に着任してもらっていますが、市としては状況に応じてあと何人か入っていただこうかなと思っています。」

檜垣「西予市の檜垣です。地元の地域づくり組織の活動をお手伝いする形で活動させていただいております。14年ほどエンジニアをしていたんですが、やりがいのある仕事がしたいということで退職しました。そして、美術大学でデザインを4年ほど勉強し、卒業を前にして就職活動をしている時JOINのホームページを見てこの制度を知りました。そして山間部での地域おこし協力隊募集案件をいろいろ探して西予市を見つけ、採用していただきました。木工で地域おこしをしたいと考えています。」

檜垣　忠雄氏

三好「西予市役所の三好です。限界集落対策として、市のほうでモデル地区を選定して『生き活き集落事業』に取り組んでいますが、そのモデル地区を活性化していただくためのお手伝いするという形で入っていただいています。

現在、４人の協力隊の方々に入ってもらっていますが、来年度は、協力隊員へのアドバイスができる人材として、外部アドバイザーを導入したいと考えています。」

大井「上島町の大井と申します。以前は大阪の会社で働いていました。いろんな地域の農業体験に参加していたんですが、そのうちの１つが岩城で、住みたいなあと思っていた時に、この制度を山尾さんに教えていただいて応募しました。今は教えてもらうことばかりですが、農業や漁業から見た観光に繋がるものなど、新しい商品を企画できたらいいなと思っています。」

山尾「上島町役場の山尾です。上島町は、『島おこし協力隊』と名前を変え、10月より女性を２名配置しております。人口減少が進んでいるということに対して、島民だけでは問題解決には至らないので、外部からの人材を入れて町の活性化に役立てようと思って導入しています。最終的には３名体制にしたいなと考えています。」

須山「今、一通り自己紹介を兼ねてお話いただいたのですが、これはちょっと宣伝しておきたいというものはないですか？」

大井　十和子氏

山尾「はい。では立石のブックスポットについてＰＲを。生名島に立石港という港があって、そこにきれいな建物があるんですけど、中身がうまく活用できていない。そこで、協力隊員から島の中の限られた空間だからこそ、本の文化を育てていきたいという案が出て、港の中に小さい子からお年寄りまで簡単に手に取れるようなブックスポットがあればいいんじゃないかということで、一応来年度４月から配置できるよう準備を進めているところです。」

須山「いろんな世代が集まってコミュニケーションをとりやすいような仕組みを作ろうとしているという意味で面白いですよね。他に何かありませんか？」

檜垣「僕には、木工所を作るという計画があります。木で何作るの？というところが今１番多い質問なんですが、いきなりアートと言っても難しいと思うので、機能があるもので、なおかつ見ていて心が和むだとか、そういった効果があるものを作りたいなと考えています。僕には作る技術がない一方で、地元の人達は木を扱うことを知っている。だから一緒になって考えていけたら、新しい木工のスタイルが見えるのかなと…。」

須山　広周氏

【問題点】

三好「本来ならもうそろそろ木工所を開設している段階ですが、今年度まで西予市では兼業はできない形になっていましたので…。ただ、金銭を得る手段がないと自立できないということで来年度からの変更点として兼業も可とします。」

須山「今は皆さんの所では兼業禁止という形ですか？」

山尾「明確なものはないですけど、要望があれば検討します。」

小笠原「現時点では禁止です。」

冨田「僕はＮＰＯと合同会社ＬＬＣを作ろうと思っていて、今年中には立ち上げたいと思っていますが、僕の悩みはその中に入れないことです。兼業禁止という部分で言えばどこかの団体役員になるということは兼業に該当するのではないかと思うんですよ。収入がないとしても…。」

須山「協力隊の方の兼業についてはもともとダメなんですか？」

小倉「県庁地域政策課の小倉です。嘱託職員であれば特別職なので、兼業は基本ＯＫ。高知県本山町とか新潟県十日町市など、募集の段階から認めているところもあります。」

小笠原「そうなんですか。できれば他の市町さんも兼業可になり、また、県の見解としてお墨付きがいただければ、当市としても検討しやすいですね。現在、協力隊を導入していない他の市町さんとかが、二の足踏んでいるところもそこがネックだと思いま

すので。」

須山「他にないですか？ちょっと困った話とかでもいいですよ。」

冨田「まだ地デジが映らないということを強く言いたい（笑）」

檜垣「僕の場合は、木工所を作るのに越えていかなきゃいけない壁があってですね、例えば、使っていない保育所を使わせてくださいと許可をとるだけでも3カ月以上かかるんですよ！まあ、ちょっとした事情があるわけなんですが。」

冨田「そうそう。廃校になった中学校とかありますよね？それを借りて何かやりたいなと思ってもそれは非常に難しい。民間の施設で例えば『あのミカン小屋貸して』というと、『ええよ、使えや』っていう感じなんですけど、市の施設は、木1本切るのも段階を踏んでということになるんですね。難しかったら『もういいや』ってことになっちゃうんですよ。それと、役場の書類とかも手続きが面倒じゃないですか、だからその辺りを行政側も臨機応変にパッと決めてほしいですね。幸い僕のいる地域事務所に関しては、所長以下、周りの皆さんが、かなりバックアップしてくださっていて、『みんなで協力しよう』という雰囲気を感じています。」

須山「その点は、協力隊が独自に動くのではなく、役場の地域おこし協力隊担当の人が横のつながりをもって、少しでもスムーズに手続きが済むような工夫も必要かもしれませんね。」

森「大井さんは今、研修中ということですが、勉強しつつ商品開発のための場所確保も視野に入れて、ある程度は手を打っておく必要性があるのかもしれないですね。」

大井「そうですね。最初は人も土地勘もまったく知らないところに来て、地域おこし協力隊として自分のやりたいことを『自由にやってください』ってことになるんですけど、農家さんのところを回ろうとして、『どこがいいですか？』って聞いても、『自分で探してみて』みたいな（笑）」まあ、自由というのはすごく有難いんですけど…。」

須山「地域おこし協力隊っていうイメージでいうと、地域に課題があって、こういうことをやりたいっていうのがあって、そこに『イイ人がいますよ』って、マッチングしてやっていく。地域の人達が求めているものを調査した上で、協力をお願いするのかなと思うんですけど、その辺りはどうなんでしょうか？」

檜垣「いや、それは地域おこし協力隊が地域のニーズを調査しなきゃいけないと僕は思います。逆に僕らが行って、地元の方にはない視点から見えることを分かりやすく整理して、住民の皆さんに伝えて初めて認識してもらえるのかなと思います。」

須山「なるほど。たしかにそれが普通であれば全然問題ないかなという気はしているんですけど、まったく住民の意思を聞かずに協力隊を入れた場合、うまくいかなければ、その活動が無駄になりかねないんじゃないかというところを思ったので…。」

檜垣「そういう教育も同時にやっていかないといけないとは思います。地元の人への啓発と地域おこし協力隊として入る人への最初の心構えみたいな。」

冨田「これから協力隊を目指す人に対するメッセージとして言わせていただくと、明確な目的・ビジョンを固めてから応募しないとダメだと思うんですよ。そこに入るからには、成果を求められるわけで…。ただ、受け入れる側と働く人とのビジョンはしっかりマッチングさせておかないと。ミスマッチがおきてくると、双方不幸で、一番不幸なのはそこに住んでいる人達ということになりかねないので…。」

小笠原「伊予市の場合は、たまたま求めている人材と巡り会えたんですが、果たして毎回毎回巡り会えるのか不安が大きいですね。これから市町間の取り合いが始まるとなると、それだけの人材が残っているのかなと…。」

冨田「僕は企業で採用もやっていたんですけど、選考基準は高くしっかりとしたものを持たないといけないと思うんですよ。誰でもどうぞということではなく、職務内容に関してもしっかりと詰めておく。そこは持つべきところですよね。」

大井「いろんな形があると思うので、檜垣さんが言われたように、基本は自分で地域に溶け込んでいくというのは必要だと思うん

ですよね。」

冨田「地域に溶け込むということは、1つはとにかくいろんなところに顔を出すことなんだと思います。そうやって、だんだん自分のことを知ってもらう機会が増えてくると、何かやろうという時に『ああ、あの人か』というふうになってくると思います。」

山尾「私自身も移住者で、出身は高知県です。私自身が島に入った時にもまず島の人に顔や名前を知ってもらわなければいけない。4年、5年過ぎたあたりから、ようやく自分がやりたいことができるなと思いました。今回、昨年10月から採用したんですけど、10月は祭りのシーズンなので、こういう地域行事に入っていくことで地域に認めてもらうというのは、タイミングとしてすごい良かったなと思いました。」

須山「根本的なことになるんですけど、例えば地域おこし協力隊を入れるっていう話っていうのは、住民の方と意見交換しているんですか?」

山尾「具体的に住民の方との話し合いというのはもってなかったですね。」

須山「来てみたものの、ミスマッチな話になった時に、誰も理解してくれないし結局イヤになったというようなこともあると聞いたことがあって、住民のニーズを知っておいた方がいいのではないかなと…。」

山尾「今度、魚島に配置する時には、一応住民の方に意見を聞く場を持とうと計画しています。そういう意見が協力隊からも出ましたので。」

冨田「僕が思うのは、上島町のように既に入っているところだと、隣はこうだよとか成功事例なんかを話せればいいですけど、新しく入れていくところで、区長さんとかに集まってもらった時に、『いや、うちはいいよ』っていう感じになるような気もします。ただ、その地域に何が必要か、どんな人が必要かどうかっていう点をしっかり確認できているかは大事ですよね。」

森「そうですね。地域がそういった意識を持つ事に加え、行政もそういう認識を持ち、3者の意識が高まることで、より地域の活性化に繋がると思います。」

須山「地域の実情をよく知った上で協力隊の導入の是非を決める方がいいですね。」

檜垣「ちょっと話が変わるんですが、僕は協力隊員同士の横の繋がりが愛媛県は弱いと思うんですよ。四国全体でも弱いなって感じていて、もっと交流できる場があったらいいなと思います。」

小倉「その点については、来年度愛媛で実施するということで、四国4県には声を掛けているところです。」

須山「小倉さんとも話をしていたんですが、来年度、四国レベルの繋がりの場を県が設けるのであれば、県レベルの繋がりは今までと同様にセンターが設けましょうと。」

大井「今まで集まったりはしたことがあるんですか?」

須山「去年、1回目は西予市さんで、2回目は伊予市の佐礼谷で行いました。それで3回目の場所を…ねぇ?(笑)」

～みんなの視線が上島町の山尾さんの方に集中し…～

山尾「うわっ…そうでした。まだ返事してなかったですね(笑)」

大井「そこに集まってなんか話をするという感じですか?」

須山「今までは、昼は意見交換会で夜は交流会という流れでしたけど、例えばテーマを少し絞って、そのことについて話しましょうというような感じもいいのかなと思います。」

小倉「四国レベルは8月ぐらいを考えているので、その前に愛媛での会ができれば…。」

須山「じゃあ、7月でも夏休み前ということで。いいですか?上島町さん(笑)」

山尾「いやぁ、もうこの流れだと断わりようがないでしょう(大笑)」

須山「さて、話がまとまったところで予定時間を超えていますので、終了したいと思います。皆様ありがとうございました。」